

第二章

四月十五日（火曜日） April 15

あれから一週間が過ぎた。一週間という時間は短いようで長い。

俺は毎朝早くに家を出たが、田村さんのほうが早かった。そして、キリのいいところで会話を切り上げ、本を読もうとする篠原さんが乱入して賑やかにする。どうやら、俺はしばらく本を教室で読むことができないらしい。

だったら、家で読めという話になってしまっただが、もう五年間……つまり中学校の頃から続けて来たことだから、そう簡単には止められない。癖になった、ということだろう。

俺の記憶が正しければ、篠原さんは去年まで朝早く来るのが無かった。以前、そのことを聞いたら、引越して、バスの時間がこの時間じゃないとだめらしい。こつ言つとき、自転車を通える俺は幸せだと思っ。まあ、それがきっかけで篠原さんともよく話すようになったのは確かだ。

篠原さんは話してみると、中々気さくな人だった。よき相談相手に……とまでは行かないが、普通の友達として中々いい存在だった。

それに義之も混ざり、どんだんグループは大きくなっていった。そして、それは次第に、俺の時間が と嘆くことにもつながった。

義之が体育の時間、バレーをしているときネットを張っている柱にぶつかったという事件もあった。普段は中々いい顔をしている義之も、鼻血を流しながら顔にライン状に赤い線が走っているのを見たときは思わず笑ってしまった。

……あとで思いっきり殴られたが……。

田村さんは体育の授業だけは欠席している。薫と一緒に皆の授業を眺めている。その空気だけが俺は嫌いだ。一人で、一階部分に備え付けられて

いるギャラリーに薫と一緒に腰を下ろしているのを見ると、俺はそのたびに罪悪感に襲われた。

*

「さて、昼飯だな」

「ああ」

それを合図に俺達はお互いの机を向かい合わせる。他の場所で思い思いのメニューで集まって昼ご飯を食べる用意をしている。

「お前はいつも弁当だよな」

義之が俺の黒い弁当箱を箸で指しながら言った。

「まあね。こつちの方が安いし……」

「だからって、毎日作るの大変だとおもうぞ？」

「弁当は親父の担当だから」

「そっか。そう言えば、お前の家、父子家庭だったな」

「うん」

お母さんは、三年前、病気で死んでしまった。それ以来、親父とは二人だけで暮らしている。

「義之はいつも購買だな」

「いつもってわけじゃないけどな。大抵は購買だな」

「弁当は作ってもらわないのか？」

「だって、面倒じゃん」

「お前は作らないだろ……と突っ込みそうになる。」

「まあ、毎日作ってもらってるんだから、少しは感謝しろよ。親にも」

「ああ」

毎日弁当を作るといっつのは相当の労力だと俺は思う。

年間二百日学校に行くとしたら、高校三年間で六百食もの弁当を作ることになる。そう考えるとかなりの回数だ。